

# 教育

## 私の学び

より高く困難な山に登りたい、といつも思っている。広島大山岳部で本格的な山登りを始めて以来、ヒマラヤ山系など6千メートルを超える山に挑んできた。

鋭く切り立ち、雪や氷に覆われた山肌。酸素は平地の半分以下と薄く、気温が氷点下20度を下回ることも少なくない。少しの判断ミスが命の危険につながる。遭難して死を意図したこともある。

広島桜が丘高(広島市東区、旧広島第一女子商高)の理科



広島登山研究所代表 松島 宏さん(61)

## 頂への挑戦「戻る勇氣」も

教諭だった1998年、中国 峰、ボベータ峰(7439メートル) キャンプから半日でボベータやカザフスタンなどの国境に挑戦した経験は忘れられない。標高7千メートルにある最終の頂上を目指す計画だったが、残り200メートルまで迫った

まつしま・ひろし 広島市西区出身。広島大水畜産(現生物生産)学部卒。大学時代に山岳部員として同大ネパールヒマラヤ学術調査隊に参加。卒業後、広島桜が丘高理科教諭を経て、2003~09年、広島県山岳連盟事務局長。国内外の山々に挑み、10年に広島登山研究所を設立した。県山岳連盟理事。

ところで日没になった。引き返すべきだったが、諦めきれず登山隊の仲間3人と予定外のピバーク(緊急露営)を決めた。

しかし、翌日から吹雪で身動きが取れなくなった。猛烈な寒さで体温が奪われる。手袋を外すと指が真っ白。両手足とも凍傷になった。明日の朝は目覚めないかもしれない。ツェルト(簡易テント)の中で恐怖を募らせていた。

4日目に天候が回復し、5千メートルの地点まで下山。無縁で救助を要請しヘリコプターで運び出された。山は逃げないのだから、引き返す勇氣を持たなければいけない、と強く学んだ。

この経験が転機となり、4年後に教師を辞めた。生死の境で踏みとどまり、好きな登

山一筋でいこうと決めた。50歳だった。

それからは2年に1回のペースで中国やネパールの未踏峰などにチャレンジしている。一方、代表を務める広島登山研究所で初心者向けの登山ツアーも開く。

無理のない登山計画の立て方や必要な装備、危険の予測方法などを、子どもや中高年の愛好家たちに伝える。自分で考えて動く心構えを身に付けてほしい。

年間200日ほど山に登る。雪の尾根を登っていると雪崩が起きないか、ふと考えてしまう。いまでも山に入るたび怖いと感じる。それでも再び登るのは、壮大な山の中で自然の一部になれたような心地よさがあるからだ。

(聞き手は鈴木直美)